二条大麦種子（ニューサチホゴールデン・とちのいぶき）栽培ごよみ

優良種子とは

「純粋性」、「健全性」、「良質」を備えたもの

- 異品種や異種穀粒、夾雑物が混入していない。
- 種子伝染性病害虫（斑葉病等）に侵されていない。
- 被害粒、未熟粒および異物の混入がない。
- 発芽率、発芽揃が良い。

『純粋性』、『健全性』の確保のために！

疑わしくは抜くべし!!

「これは異株かな？？」と迷ったら
その株全体を株元から抜き取る。

異株の除去　収穫までできるだけ多く実施する。

生育初期	・２月頃までに条間等に生えている漏生株を抜き取る。この頃までであれば草丈が低いので、条間が良く見え漏生を見つけやすい。
出穂期	・漏生株、出穂の早い株、草型および稈の色（濃淡・ワックス）の異なる株を抜き取る。
穂揃期10日後	・出穂の遅い株、稈長・穂型・穂の色の異なる株、不稔粒の多い株、等が異なる株を抜き取る。
成熟期	・成熟の早い株・遅い株、稈長・穂型等が異なる株を抜き取る。

種子伝染性病害虫（斑葉病等）を防ぐ

ほ場にあってはならない。見つけ次第
その株全体を株元から抜き取る。

月	10月		11月			12月			1月			2月			3月			4月			5月			6月		
旬	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
生育過程	出芽					分げつ開始期									茎立期			出穂期			登熟期			成熟期		
主な作業	排水対策・ほ場準備・種子消毒		施肥 播種	除草剤散布 立札立て		麦踏み		麦踏み	漏生株抜き		麦踏み		除草剤散布		麦踏み			異株抜き 病害防除			異株抜き		異株抜き 収穫		乾燥 調製	

適正な収穫・乾燥・調製作業による発芽率確保と混種防止の徹底

1．ほ場の選定

- 種子場は同一品種の団地になるよう調整し、隣接ほ場に交雑可能な大麦品種の作付が無いよう近隣農家と連携を図る。
- 排水性の良好なほ場に作付する。

2．徹底した湿害対策

- 地表排水（額縁明きょ等）と地下排水（弾丸暗きょ等）による排水性の改善を図る。
- ほ場周辺に排水溝を設置し、必ず排水路につなぐ。

3．土づくり・施肥

- 土壌酸度はpH６.５を目標

（土づくり）

- （苦土）炭カルを10ａ当たり60～100kgを施用する。
- 苦土重焼燐を10ａ当たり20kgを施用する。
- 有機物の施用例　良質完熟堆きゅう肥：１トン/10ａ目安
  ただし、未熟有機物（堆肥等）の施用は混種や雑草多発を防止するため実施しない。
- 麦わらの堆肥は混種の原因になるので施用しない。

（施肥） 施肥例　（kg/10ａ）

品種名	ＪＡ名	肥料名	施用量
ニューサチホゴールデン	しもつけ	ＢＢビール麦エース	40～50
	おやま	ＪＡおやまビール麦専用	40～45
		ビール麦化成２８４	50～60
	なすの	日の本ビール麦化成２８４	50
		ＪＡなすのスーパー麦２８４	50～65
とちのいぶき	はが野	ビール麦ライト００２	60～75

4．種子消毒

- ベンレートＴ水和剤等で必ず実施する。
- 種子消毒の効果は、一般的に浸漬処理＞湿粉衣処理＞乾粉衣処理の順で効果が高いとされている。

5．適正播種

- 播種時期　※気象庁の長期予報等を参考に、播種時期を調整する。

県北	県央	県南
11月１日～10日	11月６日～15日	11月９日～18日

- 播種量は７kg/10ａ（倒伏せず、粒の充実を良くするため、やや薄播きにする。）
- 播種は30㎝条間ドリル播き
- 播種深度は３㎝が基準

6．雑草防除

- 雑草種子の混入防止のため、雑草防除の徹底をする。
- 播種後、リベレーターＧ等で防除する。
- 生育期は、アクチノール乳剤等で防除する。

7．麦踏み

時期	・麦３葉期以降年内１～２回、年明け後から茎立期直前までに２回程度、計３～４回程度。なお、乾燥や寒さの厳しい年、県北部では回数を増やす。
効果	・地上部の過剰生育を抑制、分げつを促進し、根張りが良くなり、耐寒性を増大させる。また、霜柱や凍結層による凍上害を防止する。 特に年明け後から茎立期直前までの踏圧は、暖冬等で茎立ちが早まるのを抑え、春先の低温による幼穂凍死を回避する。また、茎立期直前の踏圧は、穂揃いを良くし、成熟ムラのない倒伏しにくい麦にする。

8．病害虫防除

赤かび病	・１回目散布は穂揃期７～10日後。２回目散布は１回目散布の７～10日後が適期である。多発性のおそれがある場合（不稔粒発生・登熟期連続降雨等）は、３回目の散布を行う。
	・トップジンＭ水和剤等を散布し防除する。
斑葉病	・種子消毒を必ず行う。
	・晩播ほど発病が多いので、遅播きを避ける。
	・発生の多いほ場では連作を避ける。

9．適期収穫

- 異種穀粒およびゴミなどの混入防止のため、早めにコンバイン、乾燥機および調製機の清掃を行う。
- 種子と一般麦の両方を栽培している場合は、最初に採種ほ場の収穫を行う。
- 収穫適期は成熟期後3～5日後で穀粒水分25%以下になった頃。（収穫適期の目安は、８割の穂首が90度以上曲がった頃。）なお、「とちのいぶき」は、ビール用二条大麦より２日程度早める。
- その年の最初に収穫した１タンク分あるいは３袋（100kg程度）は種子にしない。
- コンバインのこき胴回転数を稲で使用する時よりも１割落とし、必ず、試し刈りを行い、胚の損傷、はく皮等のないことを確認する。
- 雨上がりや朝つゆで稈がぬれているときは、乾くのを待って収穫する。

10．乾燥・調製

- 高温急激乾燥の防止
- 収穫後、直ちに乾燥を始め、ムレ麦の発生を防止する。
- 乾燥始めは、必ず２時間程度の常温通風を行い、水分ムラを少なくする。
- 穀粒温度が40℃以上にならないように注意し、ゆっくり乾燥する。
- 調製は、はく皮しないよう丁寧に行い、2.5㎜のグレーダーで選別する。
- 穂軸付着粒や、麦わら切片の混入は播種精度を落とすので調製には十分注意をする。

11．種子の農産物検査規格（合格）

- 発芽率：80%以上
- 整粒：90%以上
- 被害粒：0.5%以下
- 異　物：0.2%以下
- 水分：13.0%以下
- 色　　：品種固有の色

全量合格の優良種子の生産に努めましょう

全農とちぎ・栃木県・（公社）栃木県米麦改良協会